



# 東京武蔵野シティFCが7年ぶりの天皇杯出場を決める 第25回東京都サッカートーナメント



## 第25回東京都サッカートーナメント決勝

東京武蔵野シティFC 1-0 法政大学

0 (前半) 0  
1 (後半) 0

得点：66分 石原幸治（武蔵野）

主催：(公財) 東京都サッカー協会  
共催：共同通信社、東京新聞・東京中日スポーツ

日時：2020年9月2日(水)  
会場：味の素フィールド西が丘（無観客試合）

「第25回東京都サッカートーナメント」が9月2日に行われ、東京武蔵野シティFCが1-0で法政大学を下して優勝。第18回大会以来7年ぶりに天皇杯出場権を獲得した。

## ワンチャンスを生かした東京武蔵野シティFCが 7年ぶり5回目の大会制覇

序盤から流れを握ったのは法政大。中盤でしっかりと繋ぎながら守備のギャップをついて攻撃を繰り返していき、23分にはゴールエリア前でMF服部剛大がステップワークで相手を外して右足ミドルを放つも、これはキーパーの好守に遭いゴールならず。25分にはコーナーキックからファーで構えていたFW飯島陸が詰めに行くが、わずかに枠をとらえることができない。

飲水タイム後の27分に法政大にビッグチャンスが訪れる。ディフェンスラインからのクリアボールをFW佐藤大樹がポストプレーで落とし飯島が繋ぐと、ワンタッチでディフェンスを外したFW田中和樹がセンターサークル付近から独走。先制点のチャンスかと思われたが、シュートは右ポストを叩いた。

後半も法政大ペースでゲームは進行するが、組織的な守備で耐えた武蔵野は迎えたワンチャンスをしっかり仕留めた。66分、相手の縦パスを自陣でカットすると、そこから一気に高速カウンターを発動。FW中川諒真が右足のアウトにかけて出したスルーパスに抜け出したFW石原幸治が、飛び出してくるキーパーを冷静に見極めてループシュートを決めた。

終盤、法政大は手札を切りながら猛攻を仕掛けたが、「相手は技術が非常に高い。縦のボールは入れさせないようにということは徹底しました」（池上寿之監督）という武蔵野がしっかりと「0」で抑えて1-0で勝利し、7年ぶりの天皇杯出場権を掴んだ。

今年チームは「Jリーグ百年構想クラブ」を脱退することを決断。「我々はいまJリーグの道というのは絶たれている状況なので、そういう意味では（天皇杯に出ることで）知名度であったり、表舞台に出るという意味で来年度の個人のステップアップになる可能性もある。ここは非常に大事な試合だとみんなもわかっていたので本当によかったと思います」と池上監督。天皇杯に向けては「Jリーグとやるとなるとベスト4までいかないとできないですが、今年は上まで行けるチャンスになっているので、とにかくひとつでも上に行きたい」と意気込みを語った。

武蔵野は16日に行われる天皇杯1回戦で栃木県代表の栃木シティFCと対戦する。

## 「あんなに良いパスは来たことがない」 中川のスルーパスから後半出場・石原が決勝弾

決勝弾はまさに「あんなに良いパスは来たことがない」というスルーパスから生まれた。

「後ろの選手がしっかり守ってくれていた。絶対に1回か2回はチャン

スが来ると思っていた」と中川。じっくり待つと、その時は後半に訪れた。自陣でのパスカットからの展開でボールを受けた中川は前を向いてドリブルで運び出し、右サイドの広大なスペースにスルーパスを供給する。これに走り込んだの



が途中出場の石原だ。「（石原）幸治さんは足が速いのでそれを信じて自分は裏にボールを出しました」と中川が言えば、石原は「練習でも1回もあんなに良いパスは来たことがない（笑）。正直びっくりしたんですけど、すごく良いパスだった」と答えるほど、石原のスピードを殺さない絶妙なタイミングでのスルーパス。背番号18はそのままトップスピードでエリア内に侵入すると、ループシュートで決めてそれが決勝弾となった。最近途中出場が多くなってきているという石原だが、「やっぱり与えられたところでしっかりと結果を出すことがFWとしての責任。そこは日々こだわっているんで、今日結果に繋がって良かったと思っています」としっかりとスーパーサブとしての役割を果たした。クラブ所属5年目のFWとしての覚悟がチームに7年ぶりの天皇杯出場をもたらした。

## 「負けるならこういう試合」の法政大 昨年超え狙った今年は代表決定戦で涙を呑む

試合後、長山一也監督が「今日負けるならこういう試合しかないと思っていた」と話したように法政大は自分たちの生み出した負のスパイラルにはまってしまった。相手が粘り強く戦い、ワンチャンスを狙ってくるというのはわかっていた中で前半から多くのチャンスを迎えたが、「ゴール前での落ち着きだとか、ラストパスの質というところが低かった」（長山監督）。終盤はすでにヴァンフォーレ甲府でデビューを果たしている10番のMF長谷川元希とDF関口正大、DF高木友也（横浜FC）といったJ内定選手、学生系の準決勝、決勝で2戦連続決勝ゴールのFW中井崇仁と次々とカードを切っていったが、最後まで相手を崩し切ることができなかった。昨年はJリーグ勢を次々と下し16強に進出した天皇杯で今年は昨年越えを狙ったが果たすことができず、関口正将は「自分たちの実力がなかった」と唇を噛んだ。

